

## 原文

日本の公害問題について誤解するおそれのある表現である。

### ▶ 視点をかえて 公害の「発見」

1970年の日本は、高度経済成長のまっただなかにあり、国民は豊かな社会への自負心にあふれていた。しかし、経済開発のゆがみを国民が自分自身の問題として認識するようになった年でもあった。水俣病のように、公害はすでに発生していたのだが、それは地域限定の、他人事のように多くの日本人は考えていた。ところが1970年、大気汚染で都会の住民の健康がそこなわれていることが明らかになり、公害は一気に身近な問題となった。70年代の日本はさまざまな公害問題でゆれることになる。

21世紀初頭、日本の空と海、川は、70年代と比べるときれいになった。公害防止技術の革新があったからである。しかし企業が工場を東南アジアや中国へ移転したことも理由の一つと考えられている。



▲④ 中国の大気汚染(2000年) 北京で最も大きな製鉄所。中国の大気汚染は酸性雨という形で、周辺諸国にも影響を及ぼしている。

## 修正文

### ▶ 視点をかえて 公害撲滅への転換

公害は工業化の進展とともに問題となった(→P.154)が、日本ではとりわけ1950～60年代の高度経済成長期に、水俣病やイタイイタイ病など人体に多大な悪影響を与える公害病が発生した。70年になると、東京都杉並区の光化学スモッグ事件をはじめ、各地で大気汚染や水質汚濁などさまざまな公害が深刻化し、公害はますます身近な問題となった。住民による公害反対運動も活発になり、公害対策を審議する「公害国会」も開かれ、71年には環境庁も発足した。日本の公害問題は、70年を境に大きく転換していったのである。

21世紀初頭、日本の空・海・川は、70年代と比べるときれいになった。人々の運動や意識改革、公害防止技術の革新があったからである。その一方で、世界では公害防止の試みが追いつかない状況がある。また、大気汚染や海洋汚染が当事国だけでなく、近隣諸国に及ぶ問題も生じている。

### ▶④ 光化学スモッグの発生(1970年7月 東京都)

工場や自動車の排ガスが太陽光線によって化学反応をおこし、有害物質となって空中に停滞して、人体や植物に悪影響を及ぼした。

